

# 言葉の創造的表現力を高める授業研究

## Class Study to Improve the Creative Expression of Language

児玉 珠美 Tamami Kodama

(愛知学泉短期大学幼児教育学科)

### 抄録

保育者養成課程の授業においては、学生の表現力を高めるために様々な方法に取り組んでいる。身体や造形、音楽等、表現に関する知識を学ぶ理論的な学修を基礎として、技術的なスキルを高める演習授業を実施している。保育内容（言葉）の授業においても、子どもとの対話や多様な遊びに必要な豊かな言葉の表現力を身に付けるための学びをしている。中でも、様々な形式で物語を表現していく言葉の力は、子どもたちの想像力や言語能力の発達にとって非常に重要な要素である。

しかしながら、物語創りの経験がなく、想像したものを言語化し物語を創造していくということが、実際にどのようなことなのか、その楽しさを経験したことのない学生も多く存在している。断片的なイメージをまとめた想像世界として描き、言葉で表現していくことを学生自身が経験することが不可欠な学びとなる。さらに、言葉による創造世界に触れ、感性を揺り動かす経験も必要である。

そこで、シアタースタイルの児童文化財のひとつである人形劇観劇会を設定し、より専門性の高い表現に触れ、言葉による創造的表現について学ぶ機会を持つこととした。後期開講の保育内容（言葉）の授業において、地域の園児親子を招待し、幼児教育学科1年生全員が子どもたちと共に人形劇団むすび座の公演観劇をした。観劇会を通して声や表情、言葉の表現、子どもたちへの語りかけ方や対応の仕方等について学ぶ機会とした。上演に向けて、事前の保育内容（言葉）の授業において自然の素材を使ったお話創りと素話発表の演習授業を実施し、声の表現で難しい点等を発見することを目的とした。さらに終演後の劇団員の方によるレクチャーを通して、園生活の中での物の見立て遊びや人形と声の表現について学ぶ機会とした。事後の授業において観劇で学んだことを活用して、グループごとにペープサート作品を創造し発表した。ペープサート発表後に、今回のお話創り全体に関しての振り返りをし、グループディスカッションでの意見交換を経て、各自振り返りシートにまとめた。

今回の観劇以前の観劇経験の有無については、約70%の学生が一度も観劇していないという状況であった。初めての観劇ということもあり、感想アンケートでは、多くの学生が人形劇団員の表情と声の表現のすばらしさ、大きさ、豊かさに驚き、ひとつの世界が大きく創られていたことを実感したと答えていた。子どもたちの想像力を喚起し、心を躍動させる声の表現や人形の動きとはどのようなものなのか、専門家の表現を通して感得できたと考えられる。また、自然の素材から言葉を使った創造的表現の世界を創り上げていった今回の授業の振り返りでは、ゼロから物語を創造し表現していく難しさと同時に、葉っぱ一枚から広がる世界に感嘆したことを多くの学生が語っていた。さらに、今回の授業を通して、創造力や想像力、発信力、表現力が身に付いたという学生が多くいた。今回の授業を通して、新たな世界を創造する言葉の表現の難しさと素晴らしさを学び、創造的表現力を高めることができたと考えられる。物語の素材選びについて検討していくこと、学生たちの想像力をより喚起できるよう、物語の主人公やプロット創りに関して工夫をしていくことなどが今後の課題となる。

### キーワード

保育者養成 保育内容（言葉） 創造的表現力 授業研究

## 目次

- 1 はじめに
- 2 実施期間及び概要
- 3 授業内容と学生の様子
  - (1) 自然の素材探し
  - (2) 素話創造
  - (3) 素話発表
- 4 人形劇観劇会
- 5 観劇後のペープサート発表
- 6 振り返りシートまとめ
- 7 考察
- 8 おわりに

### 1 はじめに

新指導要領においては、知識技能の習得と未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力のバランス、そして学びを人生や社会に活かそうとする学びに向かう力・人間性等の滋養が必要であるとしている<sup>1)</sup>。保育者養成課程の授業においても、子どもたちへの指導が可能となるように、学生の表現力を高めるための様々な授業に取り組んでいる。身体や造形、音楽等、表現に関する知識を学ぶ理論的な学修を基礎として、技術的なスキルを高める演習授業を実施している。保育内容（言葉）の授業においても、子どもとの対話や様々な遊びに必要な豊かな言葉の表現力を身に付けるための学びをしている。中でも、様々な形式で物語を創造し表現する言葉の力は、子どもたちの想像力や言語能力の発達にとって非常に重要な要素である<sup>2)</sup>。

何かに触発されて沸いた断片的なイメージを、まとまった想像の世界に広げ、さらに言葉を使って表象し、物語を創造していくという一連の作業は、まさに「世界づくりとしての物語の創造<sup>3)</sup>」といえる。想像から生まれた創造的表現は、人間のあらゆる芸術活動を支えていることだけではなく、個々の人間の内面世界を支え、虚構の世界に生きることで夢や希望を生み出してくれる力となり得る<sup>4)</sup>。

しかしながら、物語創りの経験がなく、想像したイメージを言語化し物語を創造していくということが、実際にどのようなことなのか理解できない学生も多く存在している。また、言葉による創造世界に触れ、感性を揺り動かす経験を持っていない学生も存在していると考えられる。

そこで、学生自身が素材から想像したイメージを、物語として創造的に表現する授業実践に取り組むこととした。さらに、より専門性の高い言葉の創造的表現に触れる機会を設定した。保育内容（言葉）の

授業において、幼児教育学科1年生全員が地域の子どもたちと共に人形劇団の観劇をし、声や表情、言葉の表現について、さらに子どもたちへの語りかけ方や対応の仕方等について学ぶ機会とした。公演依頼をした人形劇団むすび座は、幼稚園や保育園で60年近くに渡り上演活動を継続してきた劇団であり、海外でも高い評価を受けている<sup>5)</sup>。

人形劇の上演に向けて、言葉の創造的表現の難しさ、「創造の苦しみ<sup>6)</sup>」を実感していくことができると考え、素話に挑戦することとした。素話のイメージ素材は、身近な自然のものを選んだ。その上で専門性の高い人形劇団の表現を眼前にし、声や表情の持つ表現の世界の広がりを実感することができ、子どもたちへの語りかけ方や対応の仕方について、より主体的に学ぶことができると考えた。また、公演後にレクチャータイムを設定し、人形を媒体とした表現についての技術についても学ぶ機会とした。

保育者として子どもたちの想像力を喚起し、心を躍動させる声の表現や人形の動きとはどのようなものなのか、実際の演者を通して感得することは、学生にとって保育者人生の原点になり得ると考えられる。さらに、舞台芸術を観劇する傾聴力や集中力、課題を持って観劇する主体的な姿勢、創造力等、社会人基礎力を高める機会となる。

本論文は、保育者養成校学生の創造的表現力を高める授業実践の考察を通して、成果及び今後の課題を明らかにすることを目的とする。

### 2 実施期間及び概要

本研究の対象となる授業は、保育内容（言葉）の後期授業において実施した。授業プログラムは下記の通りである。なお、今回の授業においては「物語」という文言ではなく、子どもたちが親しみやすい「お話」という文言で表現することとした。

実施週 (2019年 後期)	授業内容
第6週	素話の素材探しと構想創り
第7週	素話のお話創作
第8週	素話の練習
第9週	素話発表
第10週	素話発表・素話発表感想シートによるグループディカッション・ペープサートデッサン
第11週	人形劇観劇
第12週	ペープサート製作・セリフ再考
第13週	ペープサート発表
第14週	ペープサート発表
第15週	グループディスカッションによる振り返り

上演に向けて、事前の保育内容(言葉)の授業において自然の素材を使ったお話創りと素話発表の演習授業を実施し、声の表現で難しい点等を発見しておく。当日、終演後の劇団員の方によるレクチャーを通して、園生活の中での物の見立て遊びや人形と声の表現について学ぶ機会とした。事後の授業において観劇で学んだことを活用して、グループごとにペープサート作品を創造し発表した。

### 3 授業内容と学生の様子

#### (1) 自然の素材探し

今回の授業では、自然のものを素材としてお話を創造することとした。保育現場においても、午前中の散歩で拾ってきた様々な自然のものを使って、午後の保育活動に活用することが取り入れられている。自然のものをよく観察し、そこから何かを想像し、お話を創り上げていくことは、自然の小さなものへの共感を抱く機会にもなると考えられる。

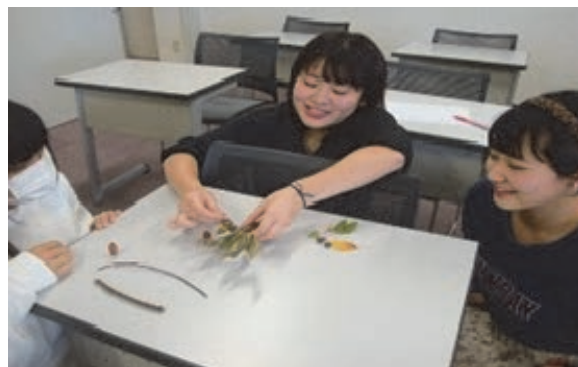


写真① 拾ってきたどんぐりや落ち葉

学生たちは、大学の中庭で自由に自然の素材探しをした。各自がひとつ素材を持ち帰り、グループ4名で素材を出し合う。11月ということもあり、どんぐりや色付いた葉っぱ等が多かった。

#### (2) 素材からお話創りへ

各自が拾ってきた素材を机の上に並べ、どんな世界が見えてくるか、どんなキャラクターに見えるか、どんなストーリーが想像できるかをグループ内で話し合った。机上に並んだどんぐりや枝を動かしてみたり、重ねてみたりと、素材を動かすことで素材が生きている何かに想像できるようであった。どんな世界にするかが決まると、キャラクターとネーミングについて話し合っていた。



写真② 落ち葉などを動かしながら、お話の構想を考える様子

素材から物語の軸となる主人公を決定し、主人公を想像の世界に羽ばたかせていく過程で、プロット創りが重要となる。学生たちは、プロットが単純なものになり、子どもたちが楽しめないのではないかと何度もディスカッションをしていた。ワクワクするストーリー展開はどういうものがあるか、自分たち自身の想像の世界と向き合いながら進めている様子であった。

今回のストーリーは、素材の特徴を活かしたものが多かった。表①にあるように、どんぐりは帽子を特徴としてお話に活かしたグループが多かった。落ち葉は色によってキャラクターを想像し、舟や魔法の絨毯として登場させるグループもあった。小枝や木の実、石についても、それぞれをよく観察し、形や色から感じるものをお話の登場物として擬人化させていた。

ストーリーが決定すると、ナレーション及び登場人物のセリフを考え、お話を創り上げていく作業に



表① 自然の素材から想像したお話の世界 (3クラス 21グループ)

素材	特徴とした点	お話のタイトル
どんぐり	殻斗 (帽子) かわいらしい形	どんちゃんとうりちゃんの冒険・どんぐりくんの不思議な一日・どんぐりの帽子屋さん・どんくんとゴミステマン・どんくんとぐりちゃん・どんぐりぼうやの探しもの・なきくんの大冒険
落ち葉	色 風に吹かれていく軽さや形	はっぱくんの冒険・不思議な冒険・大魔王との闘い・あきちゃんの冒険・なかなかおどりできるかな・葉っぱのグレディ・宝ものをとりかえそう・リーフくんの冒険
木の実	小さくかわいい形	おこりんぼうの王様・あつくんの大冒険・あきちゃんの冒険
石	ごつごつした形	いしくんの大冒険・おこりんぼうの王さま
小枝	弱そうな細長い形	いちょうちゃんとえだくんの冒険

取り組んだ。対象となる子どもたちは年長という設定をし、下記の点に考慮するよう指導した。

- ・発達過程を考慮し、年長クラスの子どもが理解できる言葉を使用すること
- ・ナレーションではなく、登場人物に語らせて状況がわかるようにすること
- ・擬音語、擬態語を使い、子どもたちが楽しめるリズム感あるセリフにすること



写真③ プロットを考え、お話を活字化していく様子

### (3) 素話の発表

今回の授業においては、素話とペープサートを介した表現方法の違いを体験的に学ぶという目的もあり、創造したお話をまずは素話で発表した。ひとつのお話をグループメンバー全員が語っていくことを基本とした。登場人物ごとに担当を決めて語るグループ、場面ごとに担当を交替するグループがあった。どのグループもセリフを覚える作業に時間がかかった様子であった。お話全体をイメージし、セリフは臨機応変に変えてよいという助言もしたが、決めた

通りに言わなくてはならないということに囚われてしまい、途中で言葉が出なくなる学生もいた。

全グループ発表終了後に、他学生たちの感想シートを読み合い、自分たちの表現についての振り返りを通して、今後の課題を明らかにすることができた。



写真④ 素話で自分たちの創作したお話を語る様子

## 4 人形劇観劇会

### (1) 観劇会の様子

観劇会は2019年11月16日(土)の午前10時から11時に実施し、11時から11時30分まではレクチャータイムとした。今回、上演を依頼した作品は、幼児向け作品「ぶんぶく茶がま」と「おばあさんとマリーちゃん」の2作品である。近辺の保育園及び幼稚園の協力を得てチラシ配布による周知を図り、事前申し込みの方法をとった。当日は地域の親子32名の参加があった。子どもたちに最前列に座ってもらい、その後ろに保護者、学生という順に座った。



写真⑤ 「ぶんぶくちやがま」上演の様子



写真⑥ 途中全員での手遊びの様子



写真⑦ 学生が参加しての人形との交流



写真⑧ 終演後、レクチャーを受ける様子

会場は本学の幼児体育室を使用した。床が固く冷えるため、当日の朝、学生たちが床にマットを敷いて見やすい環境創りをした。

2つの作品の間に、手遊びや観客参加の人形との交流の場が設定されていた。劇団員と子どもたちとのユーモアあふれるやりとりや、会場を盛り上げる語りかけに、学生たちは子どもたちと共に身体を揺らし、大きな笑い声を上げていた。

終演後、親子が退室した後、人形の動かし方や小道具についてのレクチャーを受けた。その後、学生からの質問タイムにおいて、下記の質問があった。

- ① BGMの操作はどうやってされているのか。
- ② 何年くらい人形劇をしてみえるのか。
- ③ 声が別人のように変化するが、どうすればできるのか。
- ④ 人形劇を演じているときに、何を一番大切にされているか。

①に関しては、足ペダル等の装置の説明があり、その創意工夫に学生たちは感嘆の声を上げていた。②についてはそれぞれ30年と35年の経歴であった。③については、「意識していない。人形の設定を想像し、人形の気持ちになれば、その声になる。おばあさんはおばあさんに、子どもは子どもに、うれしいときはうれしい声に、悲しいときは悲しい声に。その人の気持ちになればそういう声が出てくれる。」という答えであった。さらに④の答えは「一番・・・難しいですね。あえて言えば、いつも初めて演じる気持ちで演じているということかな。何回も何回も演じているけど子どもたちの前では、新しい気持ちで、まずは自分が楽しい気持ちでね。」という言葉が返ってきた。その答えを聞いた学生たち全体の動きが一瞬止まり、この言葉の深い意味を受け止め、考えている様子であった。

## (2) 感想アンケート内容と考察

観劇後、学生たちに感想アンケートを実施した。当日の欠席者9名については、後日録画動画による観劇を実施しアンケートに答えた。人形劇の観劇経験については、経験なしが68%、1回が16.5%、2回～3回が15%、3回以上が0.5%という結果であった。幼少期の観劇で記憶が残っていないという学生もいると考えられるが、記憶に残るような人形劇を観劇したことがない学生が70%近くいたという結





写真⑨ 片付け時にも質問する学生たち

果は重く受け止める必要がある。初めて観劇する人形劇の世界に、多くの学生たちが魅了されていたようであった。以下、アンケートの自由記述内容の中で、複数記述されていた内容をまとめていく。

### ① 全体感想

- ・表情と声の表現のすばらしさ、大きさ、豊かさに驚いた。
- ・楽しさが伝わってきたのは、劇団員の方が楽しんでみえたからだということがよくわかった。
- ・人形のイメージにぴったりの声だった。
- ・効果音や音楽がうまく活用されていた。
- ・明るい場面では笑顔、悲しい場面では悲しい表情で人形の気持ちになっている。
- ・毎回、初演の気持ち、初めて演じる気持ちという言葉が強く印象に残っている。
- ・子どもたちに疑問を投げかけて 子どもたちがお話に参加できるようにしていた。
- ・小道具がとてもうまく工夫されている。
- ・ハキハキと聞きやすい言葉、発声であった。
- ・大きなリアクションがあり、言葉の抑揚、高さ大きさ変化、速度変化があることによって、お話がよりおもしろくなることがわかった。
- ・ひとつの世界が大きく創られていた。

### ② 子どもたちの反応について

- ・劇中でも身体を動かしたり、声を出したりしてとても楽しそうだった。
- ・言葉や動作を繰り返す箇所、子どもたちの笑いが多かった。
- ・劇団員の方の楽しい気持ちが笑顔になり、それが子どもたちにも伝わっていた。
- ・人形の動きを真剣にみつめていた。
- ・子どもたちがちょっと飽きてきたかなあと、むすび座さんが、子どもたちを惹きつける声や動作をしていた。

- ・音の変化には、みんなとても集中していた。音に敏感なのだったと思った。
- ・目も耳も身体も反応していて、五感全部使って人形劇を見ていると思った。

学生たちの感想からも、むすび座の人形劇を通して、非常に多くのことを感じたことがわかる。自分自身がワクワクし、心が躍動し、思い切り表情を動かして笑うことを通して、創造的表現の楽しさを身体的に感得することができたと考えられる。技術的なことはもちろん大切ではあるが、何よりも劇団員の表現に対する姿勢を受け止めることができたのではないだろうか。自分が楽しむことが、子どもたちが楽しむことに繋がっていくことを実感できたことは、貴重な経験であったといえる。

## 5 観劇後のペープサート発表

観劇会の後、授業において素話をペープサートとして創造し、動きや言葉で表現することに発展させた。むすび座公演で刺激をもらった成果が授業においても顕れていた。ペープサートでの表現に苦手意識を持っていた学生たちも、積極的に製作作業に関わるようになった。また、セリフの練習を恥ずかしがっていた学生たちも、楽しみながら練習に臨んでいる様子であった。

さらにペープサート作品発表に向けて、素話の他学生たちの感想シートをもとに、改善点を各グループで再度検討し、構成やセリフ等を修正していった。写真からも、表現する学生たちの表情が大きくなり、表現を楽しんでいる様子が窺われる。また、発声や滑舌にも意識して取り組んでいる様子であった。発表は、各クラスの授業2コマを使って実施した。写真は発表の様子の一部である。



写真⑩ 製作したペープサートでセリフや動きの練習をする学生たち



写真⑪ ペープサート導入の手遊びの様子

写真⑫ 素話から工夫して創作したペープサート



の発表をする学生たち



写真⑬ 背景の木を考案し、場面を創ったグループ

## 6 振り返りシートのまとめと考察

### (1) 振り返りシートまとめ

最終授業時に授業の振り返りについてグループディスカッションし、その後、各自振り返りシートに記入した。グループディスカッションでは、お話創りの授業全体を振り返り、印象に残っていることをフリートークの形式で実施した。各自の振り返りシートの項目は、①人形劇観劇で学んだこと ②素話とペープサートの違い ③共同でお話を創った感想④今回お話創りで身に付いた力⑤全体を通しての感想の5点についてである。今回、経験を省察的に振り返るために、すべて自らの言葉で表現する自由記述形式とした。記述の量的な差はあったものの、少な

い学生でも用紙全体の8割は記述されていた。多かった内容をまとめて記述する。

#### ①人形劇観劇から学んだこと

- ・表現の見本になってくれた。2回の発表の間にむすび座観劇ができたことは大きな意味があった。
- ・声の抑揚、間のとりかた、キャラクターの動かし方、感情によって動きを変えること等。
- ・役によって声や話すスピードを変えること。
- ・即興的にお話を創るおもしろさ。
- ・ゆっくりと聞き取りやすく語りかけることの大切さ。
- ・聞く側が入り込めるような語りかけ方。
- ・表現者自身が楽しむこと、表現者が楽しんでいないと子どもたちも楽しめないということ。
- ・導入の大切さ、オリジナルソング等でわくわく感を創る等。
- ・堂々と表現すること、恥ずかしがってはいない子どもたち楽しめない。なりきって楽しむこと。
- ・効果音やBGMなどの音が劇の世界に入り込むための大切なものであること。
- ・人形やペープサートの動かし方や切り替え方。
- ・ナレーターと演じているときの違いを意識すること。
- ・擬音語、擬態語の効果の大きさ。

#### ②素話とペープサートと違い

- ・物を介した表現のほうが、表現はしやすい 感情移入しやすい。役になりきれ。
- ・素話は声と顔の表情も大切、ペープサートは動きと声の表情が重要。
- ・ペープサーは視覚的に楽しめるが、素話は声しかないで、難しさもある。
- ・ペープサートの方が内容を理解しやすい。
- ・セリフと一緒にペープサートを動かすことが難しいが、動きがあることで生き生きとしてくる。

#### ③今回のお話創りで身に付いた力 (複数回答)

- ・創造力 50%・想像力 47%・表現力 21%・発信力 15%・協調性 9%・主体性 8%・語彙力 7%・課題発見力 5%・柔軟性 4%・コミュニケーション力 4%・感受性 2%

#### ④共同でお話創りに取り組んだことについて

- ・ひとりだと何も浮かばないが、話し合っているう

ちに刺激し合い、様々なアイデアが出る。

- ・いろいろな考えをまとめるのが難しい。
- ・みんなの声が違って、いろいろな声の表現ができて楽しい。

#### ⑤お話創りを通しての感想

〈創造的表現に関わっての感想〉

- ・創り上げ、発表した達成感があった。
- ・身近なものからの創るお話は、創りやすくおもしろさがあった。
- ・季節を感じられるものからのお話は、自然のものに興味関心を持つ機会になる。
- ・ひとつの石や葉っぱから、こんなにも様々なお話が生まれることに驚いた。
- ・拾ってきたものが、ここまで広がるという楽しさを実感できた。
- ・どのグループも同じようなものを拾ってきたのに、みんな違うお話になり、おもしろさがあった。
- ・自分でも驚くほどの発想力が出た。
- ・ゼロからのお話は、子どもたちが親しみやすい名前を考えるのに悩んだ。
- ・自分でオリジナルのお話を創る機会はなかったので大変だったが充実していた。
- ・登場人物になりきって表現する楽しさを実感できた。
- ・プロットを考案し、みんなの意見まとめることが大変だった。
- ・プロットからアレンジしていくことが大変
- ・一般的なお話になってしまいがちで、子どもたちが楽しめるオリジナルのお話を考えるのが難しかった。
- ・子どもの発達過程を考慮したストーリーやセリフが難しかった。
- ・ゼロからお話を創り、形のあるものにしていくことは時間がかかること、大変さがあることを実感した。

〈今後の課題〉

- ・春夏秋冬それぞれ自然のものから、どんなお話が生まれるか、楽しみ。挑戦したい。
- ・言葉の表現やお話の展開 自分の中に素材がない、もっとお話しや絵本を読んで学ぶ。
- ・どのような言葉を使えば子どもたちに伝わるか。
- ・場面から場面へのつなぎ方。
- ・感情を込めて語ること 絵本を読んで身に付けて

いきたい。

#### (2) 振り返りの考察

多くの学生たちが、「むすび座の前に素話をして、その後、ペープサートの発表をしたことに大きな意味があった」と記述していた。また、「表現者自身が楽しむこと、表現者が楽しんでないと子どもたちも楽しめないということ」を実感したという答えも多かった。約70%の学生が初めての人形劇観劇であったということもあり、人形劇団員の表情と声の表現のすばらしさ、大きさ、豊かさに驚き、ひとつの世界が大きく創られていたことを実感したと考えられる。事後の授業において作品に取り組む場合も、上演作品が学生たちの感性への大きな刺激となり、より広い深い創造の世界の発見に繋がっていったと考えられる。子どもたちの想像力を喚起し、心を躍動させる声の表現や人形の動きとはどのようなものなのか、実際の演者を通して感得できたといえる。

また、自然の素材から素話、ペープサートと、言葉を使った創造的表現の世界を創り上げた今回の授業の振り返りでは、ゼロから物語を創造し表現していく難しさと同時に、葉っぱ一枚から広がる世界に感嘆したことを多くの学生が語っていた。素材に関しては、どのようなものが適切であるか、今後検討していくことが課題となる。また、イメージとプロット考案をどう結び付けていくかについて、イメージを視覚化する等の工夫が今後必要である。

今回の授業を通して身に付いた力に関しては、創造力や想像力、表現力という答えが多かった。舞台芸術を観劇する傾聴力や集中力、課題を持って観劇する主体的な姿勢、創造力等、社会人基礎力を高める機会となったと考えられる。また、選択形式ではなく、自らが表現した想像力や創造力等の文言には、社会人基礎力を主体的に捉える姿勢も窺える。

言葉の表現やお話の展開の方法が自分の中にあることを実感し、今後の課題が発見できたという学生も多数いた。また、「春夏秋冬それぞれ自然のものから、どんなお話が生まれるか挑戦したい」と、さらに想像力を膨らませていく学生も数名いた。

今回の授業を通して、イメージを言葉によって創造していく創造的表現の難しさと素晴らしさを、まさに身体的に学ぶことができたのではないだろうか。今後、子どもたちの創造的表現活動に今回の経験を活かしていくことを期待する。



## おわりに

本論文は、保育者養成校学生の創造的表現力を高める授業実践の考察を通して、成果及び今後の課題を明らかにすることを目的とした。

創造的表現力を高めるために取り組んだ本授業においては、学生たちは創造的表現の難しさと楽しさを経験し、より優れた専門性を有する人たちの表現に触れることによって、感性と表現の新たな扉を開くことができたという成果があった。

物語の素材選びについて、さらに検討していくこと、物語の主人公やプロット創りについて、学生たちの想像力をより喚起できる工夫をしていくこと等といった今後の課題も明らかになった。

## 謝 辞

本研究は、2019年度愛知学泉短期大学学内版 GP の助成を受けたものである。

## 注

- 1) 「新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ—」文部科学省 (2017) 年において記述されている。
- 2) 想像力と子どもの発達に深く関わっていることは様々な領域における多くの先行研究で明らかにされている。ヴィゴツキー『子どもの想像力と創造』(2002)、D.N.スターン『乳児の対人世界理論編』(1989)、内田伸子『想像力の発達—創造的想像のメカニズム』(1990) 等。
- 3) 内田伸子氏の様々な著書や講演会でこの言葉が使用されている。『想像力の発達』サイエンス社 (1990) 等。
- 4) 想像力が希望に繋がることに関しては、V.E.フランクル『夜と霧』霜山徳爾 訳、みすず書房 (1985) やハーマン・J.L『心的外傷と回復』中井久夫 訳、みすず書房 (1996) 等、多くの著書に示されている。
- 5) 人形劇団むすび座 HP  
<https://www.musubiza.co.jp/>
- 6) ヴィゴツキーは著書『子どもの想像力と創造』の中で、創造の苦しみについて記述している。想像力の働きによって、創造へとつながっていくことこそが教育であり、創造の苦しみがあってこそ、教育が存在するとしている。

## 参考文献

- 1) 乾 敏郎『脳科学からみる子どもの心の育ち』ミネルヴァ書房 (2013) ヴィゴツキー『子どもの想像力と創造』広瀬信雄 訳、新読書社 (2002)
- 2) 今井和子『なぜごっこ遊び?』フレーベル館 (1992)
- 3) 内田伸子『ごっこからファンタジーへ—子どもの想像世界』新曜社 (1986)
- 4) 内田伸子『想像力の発達—創造的想像のメカニズム』サイエンス社 (1990) 等。
- 5) エリン・グリーン『ストーリーテリング—その心と技』芦田悦子他 訳、こぐま社 (2009)
- 6) 岡本夏木『子どもとことば』岩波書店 (1982)
- 7) K.イーガン『想像力と教育』高屋景一・左柳光代 訳、北大路書房 (2013)
- 8) 河合隼雄・坂田寛夫・谷川俊太郎『声の力』岩波書店化 (2002)
- 9) 金城久美子他『保育者のための言語表現の技術』萌文書林 (2016)
- 10) 厚生労働省「保育所保育指針」・文部科学省「幼稚園教育要領」・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」平成 30 年施行
- 11) スターン, D. N.『乳児の対人世界—理論編—』神庭靖子 神庭重信 訳、岩崎学術出版社 (1989)
- 12) イデイス・コップ『イメージネーションの生態学』改訳版 黒坂三和子・村上朝子 訳、新思索社 (2012)

(原稿受理年月日: 2020 年 1 月 15 日)